高野山大学専任講師・坂口太郎氏

（1）人格主義に立脚する平泉史学と、それ以前の実証史学を対置されますが、一方で平泉澄は考証に練達した側面を持っていました。これは軽視すべきではない事実と存じます。

また、この現象は、「つとめて事実を明らかにしようとする実証的態度と、それをふまへて義理の分別をするという道義的態度が一体となってゐた」（久保田収『近世史学史論考』281 頁）と評される崎門の浅見絅斎や、その影響を受けた水戸の『大日本史』にも通じるものと考えますが、これらをどのように評価されますか？

前者に関してはご指摘通りと存じます。しかし、私自身は決して平泉史学の実証的な側面を切り捨てているわけではありません。もし斯様に読める、というのであれば、私の説明不足であり、御寛恕願いたく存じます。

後者ですが、平泉史学の形成は、崎門学とその影響を受けた水戸学に関連させて考える事も可能かと存じますが、それと同じように近代史学とナンバースクールの学問潮流など、複合している要因があることは言うまでもないかと思われます。ただ、問題となるのは、カント的な人間存在と垂加神道における「敬」とが、相似てくるという事です。このことは、今後の課題とさせていただきたく存じます。

（2）平泉澄の著作を読むと、彼と史上の人物との間に、往々にして「冥々の力」が働き、類まれなる感応が生ずる（と平泉が認識した）事例が見られます。芭蕉や明恵がその好例でしょうが、これらの例を用いて、「冥々の力」の具体的様相を、平泉自身の生涯に即して検討すべきではなかったでしょうか？

個々の事例を語るべきでは確かにありましたが、仰るところの「具体的様相」に関して、少しばかり変遷があるように思われます。その変遷がいかなる要因によるものか解釈を出しかねましたゆえに、斯様に、初期にしか焦点を絞ることが出来ませんでした。ひとえに私の力不足の故であります。

（3）平泉史学は、強固な一貫性を持つ一方、時期的段階差も顕著と考えます。この点は、いかがでしょうか？

仰る通りかと存じます。しかし、時間的段階差を考えるとき、問題となるのはその成立期であります。しかし、平泉澄が関東大震災で蔵書のほとんどを失ったという平泉隆房氏の証言もあります。（『芸林』64 巻 1 号）それゆえに、何を受容したのか、に関して私の力量を超える作業になり、かえって論旨を不透明にしてしまうと考えられましたので、初期に絞りました。

（4）細かなことですが、資料の２頁において、「『吾妻鏡』は公卿日記の集成である」とされるのは、よく理解できません。また、『愚管抄』の著者は慈遍ではなく、慈円です。

かの個所で述べたかったことは、「どのような史料においても純粋客観的な視座などありえない」というベタなヴィトゲンシュタイン以降の言語的展開論の要素を述べたかった、それだけであります。『愚管抄』の作者の取り違えに関しては、私の取り違えです。

國學院大學大学院生　大貫大樹氏

（１）明らかにされようとした「平泉史学における『人間』の概念」とはどのようなものなのか。最終的な結論は田中卓先生の見解に依拠しているように窺えますが、平泉の歴史観が「人格主義」であった事は既に先行研究でも論じられております。その上で、今回の御発表で明らかにしようとされた点が研究史的に如何なる意義を持つのか。田中先生の御見解をより固める事を意図したのか、或いはそれまでの研究史を補足しようと試みたのか、そうであるならば、どの点を補充したのか、御教示下さい。

「それまでの研究史を補足しよう」としたのです。従来、史学史、哲学史は、それ自体独立してきた感があります。しかし、「近代歴史学」の黎明期にはたしかに「歴史哲学」として、ひとつの解釈学として成立していました。その一端を明らかにしようとしたのが一つ。
また、田中卓先生の「人格主義」には、―「皇国護持史観」などにも表れているように思われますが―その内実の分析が少しく欠けているように思われました。その「人格」の内実も、一つには大正教養主義の出版物、一つには垂加神道の「敬」、そしてまたカントの道徳哲学が挙げられます。その内で、私は平泉澄その人の思想形成にドイツ観念論の受容を見て取ることも可能であると考えています。

（２）そもそも、平泉は何故、自らの歴史観を世に問うたのか。二、三頁にて、示しておられる平泉の「歴史学」に対する考えなどは、当該期に於ける思潮のみならず、それまでの歴史学の動向に対する危機意識が前提にあるのではないか、と思いますが如何でしょうか。御発表の内容を踏まえて、補足する点があれば御教示下さい。

特にありません。ご指摘の通りであると思われます。ただ、植村氏の述べる事とは正反対に、「平泉史学」と呼ぶべきものは、まったく内部において完結するものではないと思っています。

（３）三頁目、「『人格』という語の受容・解釈において、カント『純粋理性批判』乃至新カント学派、特に西南学派（ヴィンデルバントら）の影響を色濃く受けたものである」という点について、宜しければ詳しく御教示下さい。

大変大きな内容となってしまいますので、要点と参考文献のみ挙げさせて頂きたく存じます。当時最先端の学問として新カント学派があることは周知のとおりですが、その中でヴィンデルバント―この名前は「我が歴史観」にも見えます―が本邦において先んじて紹介、受容されました。(宮野真生子『出会いのあわい』平成三十一年、堀之内出版)また、すでに平泉澄その人の新カント学派、またドイツ観念論の受容は荒川久壽男遺稿集『読史余滴』四六三～四七九頁所収の、「平泉澄博士の史学の初期形成」について指摘されております。ただ、新カント学派とドイツ観念論とは、その歴史観において、果たして同一視できるものでしょうか。これに関しては H・シュネーデルバッハ『ドイツ哲学史 1831‐1933』(平成二十一年、法政大学出版局）に詳しいので、参照願えれば幸いです。

（４）「歴史を貫く冥々の力」とは、「直接の関係も間接の関係もなく、その人格はある時復活し、その理想を同じくして在り」云々（六頁）とありますが、より詳しく御教示下さい。

これは平泉の「國史学の骨髄」に詳しいのですが、その論文にあるように、平泉史学において、歴史の主体である「我等の人格」の復活はそのような形をとる、という事です。
また、「歴史を貫く冥々の力」にもあるように、北畠親房や楠木正成の精神（＝人格）は、およそ３００年を隔てて山崎闇斎に影響を及ぼし、その闇斎の精神は吉田東篁を動かし、東篁は松平春嶽を、春嶽は橋本景岳を、というような、「歴史の背後を貫くもの」として、「歴史を貫く冥々の力」はある、という事を述べたかった次第であります。

皇學館大学助教　谷戸佑紀氏
「興味深く拝見しました。発表者は、いわゆる「平泉史学」の成立時期を何時に想定されていますか。成立の背景・要因など、お考えをお聞かせ頂ければと思います。」

これもまた極めて簡潔に述べることができない、難しい問題であると考えます。
一つには平泉の蔵書が関東大震災によって焼失していること。
一つにはそれによって平泉に影響を与えた書籍が本人の著作からでしか考えることが出来ないという事。
ただ、坂口太郎氏の質問とも関係してくるのですが、平泉史学は時間的段階差があり、そういった意味では一九八四年が正しく平泉史学の成立であるという事も出来ましょう。
本発表では、大まかに戦前期―戦中期－戦後期という時代区分を設けたつもりですが、さらに戦前期は東京帝国大学在学時－大学院・助教授時代―（渡欧期）－戦中期まで、といった区分が可能であるかと思われます。